

第9回博物館・藝大研修

都立多摩高等学校教諭 甲 斐

1. はじめに

「国宝をガラスケースなしで観ることが出来る」研修があるという噂を聞きつけ、是非参加してみたいと思ったのが一昨年のことでした。この研修が、噂のものであることを知ったのは、昨年のもので、早速参加しましたが昨年度は金工ということもあり国宝を拝むことは出来ませんでした。本年度、日本の美(絵画I)とすることで期待を覚え、ほぼ都市伝説化した「国宝拝見説」を確かめに2年連続で参加させて頂くこととなりました。

2. 博物館芸大研修について

時 期 7月25日～28日

場 所 東京国立博物館・東京藝術大学

講 師 沖松健次郎(東京国立博物館)

藤田 千織(東京国立博物館)

齋藤 典彦(東京芸術大学)

本郷 寛(東京芸術大学)

- 内 容
- ①東京国立博物館スクールプログラムを軸に高校との連携をとり、博物館の活用法について講義。
 - ②東京藝術大学日本画ゼミにて、日本の伝統画法(縹縹彩色)を用いた作品制作。
 - ③美術館・博物館と連携した鑑賞授業についての実践・研究発表、及び質疑応答。意見交換。

参加者 全国から30名

3. 研修会について

夏休み入って1週間ほど経った暑い日に研修会は始まりました。調査書や補講など所属高での仕事は山積しておりましたが、頭を切り替えて参加させて頂きました。

1日目午前

東京国立博物館にて総合文化展を鑑賞しました。私の目当ては、国宝「久隅守景筆夕顔棚納涼図屏風」でしたが、改めて日本の美意識の高さに気付かされました。もちろんその他の貴重な文化財にも触れ、日頃の喧騒から離れた有意義な時間を過ごすことが出来ました。

1日目午後

本研修の開会式が行われ、東京国立博物館の教育普及プログラムについての講義がありました。プログラムを大きくまとめると以下の4つの点になります。

1. レクチャールームでのプログラム
2. 展示室での作品鑑賞プログラム
3. 体験型ワークショップ
4. キャリア学習のためのプログラム

東京国立博物館での教育普及プログラムは、毎年参加校増加傾向にあるということでしたが、若年層の利用者数は未だ伸び悩んでいるのが現状との事でした。

続いて、「日本の絵画～仏画～」一歴史と鑑賞一の講義がありました。仏画を鑑賞・理解するためのアプローチポイント

1. 仏教史や文化・政治史との関係
2. 主題について
3. 材料と表現・技法について
4. 近隣諸国との比較

の項目を中心とした講義でした。展示や現存数、最近の研究結果等も踏まえ、研究員側から見た講義だったので、興味深いものがありました。

休憩を挟んでお待ちかねの鑑賞の時間。

展示品のリスト全てを掲載することは出来ませんが、国宝指定の仏画は3件。

- ・千手観音像(12世紀)東京国立博物館蔵
- ・十六羅漢像(11世紀)東京国立博物館蔵
- ・善無畏像(11世紀)兵庫一乗寺蔵

全て絹本着色、平安仏画の白眉です。ガラスケース無しで、間近で観られました。平安

の優美な線や裏彩色が醸す豊かな量感、古さから得られる荘厳さなど通常展示で感じられない体験をすることが出来ました。

2日目

東京芸術大学にて、縹緗彩色の簡単なレクチャーを受けました。縹緗彩色は、建築・絵画・工芸などの装飾文様における彩色技法の一つであり、同一系統の色彩の濃淡の変化をぼかしの方法によらず、濃い色調から淡い色調へ段階的に区切りをつけながら塗ることを言います。

使用する岩絵の具は、重金属が含まれているものもあり、廃棄については詳細な話を聞くことが出来ました。膠と岩絵の具を分離させる膠抜きを行い、産業廃棄物と実験排水に流すぶんに分けて処理をしました。(しかし、排水を分析すると微量の重金属が検出されるらしいです。)

今回の研修では、12×21×2.4cmの杉板を用い、表面に下地の胡粉を塗り彩色をしました。表面が乾くまでにデザインを選択(今回は3パターンが用意されてました)、色鉛筆で彩色計画(画像①)をたて、計画通りに彩色を開始しました。今回使用する岩絵の具は群青・白郡・緑青・白緑・鎌倉朱・丹・舶来黄土・花胡粉でした。各色、もしくは胡粉を混ぜて淡い色調にしたりして使用することでした。意外だったのは、緑青は胡粉と混ぜ合わせるが出来ない(混ぜて使用した方もいました)事でした。混ぜるなら白緑を使用することでした。また、岩絵の具は、すり鉢と搗粉木で細かくしなければならぬと思っていたが、紙で包んで上から摺り潰せばいいとの事だった。紙で丁寧に潰した粒子を絵皿に写し膠で丁寧に混ぜて使用しました。

3日目午前

東京芸術大学で縹緗彩色の続きを行いました。膠が固まっていたため湯煎で溶いて使うところから始まりました。パターンは限られていましたが、参加者それぞれが個性的な彩

色を行っていました。黒を使う時は膠を混ぜた墨を用いましたが、あまり魅力的な作用はしませんでした。出来上がった作品は不思議な雰囲気のものになりました。

3日目午後

東京国立博物館に戻り、授業実践の発表を聞きました。埼玉県立大宮東高等学校の取組、ようこそ先輩トーク&ウォッシュューは、パブリックスペースに展示されている同校出身作家の作品について作家自身から説明を受け、また洗浄することで深く造形を味わうというものでした。作家の作品を収蔵している地域の美術館とも連携しており、自校でも出来ないかと考えながら発表を聞くことが出来ました。

情報交換では、各自治体の教員がどのような課題を持ち、解決に向けて尽力されているかなど話を聞くことが出来ました。

4. まとめ

博物館での文化財を鑑賞する講義や東京芸術大学での実習、他府県からの参加者からの情報交換など実りのある研修だったと思います。2年連続で、定員のあるこの研修に参加しておいてなんですが、もっとたくさんの先生方がこの研修に参加し、授業力や実技力向上だけでなく、豊かな感性を養えることが出来たらと考えております。